

〔「大和文華館の日本漆工」展によせて〕

枕形硯箱をめぐって

一原羊遊斎、松江藩松平家、酒井抱一の関わりに注目して一

接着力に優れた漆を筆先につけて文様を描き、金粉や銀粉を蒔きつける蒔絵は、漆工の様々な技法の中でも特に日本で好まれ、数多くの優品が残されています。蒔絵を手掛ける蒔絵師も多く活躍しましたが、江戸時代以前は蒔絵師個人の名前が表に出ることは稀でした。しかし、経済活動が活発になり、蒔絵作品の受容層が広がる江戸時代に入ると、様々な蒔絵師たちの名前が知られるようになります。その中でも江戸時代後期に人気を博した蒔絵師が原羊遊斎（1769～1845）です。羊遊斎の出自はよく分かっていません。幸阿弥家や古満家のように、江戸幕府の御用を代々務めた蒔絵師の名家に生まれたわけではなさそうです。この羊遊斎が飛躍する背景には、二人の人物との交流がありました。それが、松平治郷（1751～1818）と酒井抱一（1761～1828）です。

松平治郷は松江藩第七代藩主で、不昧の号で知られます（以降は不昧と記述）。不昧は、財政を立て直し、松江藩中興の祖と言われる一方で、茶の湯に傾倒した大名茶人としても有名です。多くの茶道具の名品を蒐集するとともに、自分好みの新しい茶道具も積極的に作らせています。この不昧の要望・趣味に応える蒔絵師の一人が羊遊斎でした。不昧は、自身の所蔵する蒔絵の名品「蝶螺鈿蒔絵手箱」（国宝、鎌倉時代、畠山記念館蔵）、「片輪車螺鈿蒔絵手箱」（国宝、鎌倉時代、東京国立博物館蔵）を羊遊斎に

見せて学ばせたり、やはり自身の所蔵する「高台寺蒔絵大甕」（桃山時代、北村美術館蔵）をもとに「菊蒔絵大甕」を30セット制作させたりしています。不昧との交流によって、羊遊斎は名品の技法を学び取り、新しいものを生み出す発想力を磨いたものと考えられます。

不昧以上に多くの羊遊斎作品と関わるのが、酒井抱一です。抱一は、京都で主に展開してきた琳派の画風を江戸に広めたことから、江戸琳派の祖と呼ばれています。瀟洒で、洗練された草花図などを得意とし、人気絵師として活躍しました。抱一は、江戸時代の絵師としては格別に高い身分の出身で、姫路藩主酒井忠一の弟にあたります。忠一の茶の湯の師が不昧であり、抱一と不昧にも交流がありました。抱一の私淑した尾形光琳（1658～1716）や本阿弥光悦（1558～1637）が蒔絵作品のデザインを手掛けていることに触発されたのか、抱一も蒔絵のデザインに積極的に関わっており、羊遊斎に下絵を提供しています。蒔絵技法が発達し、やや過剰な装飾となっていた江戸時代後半において、すっきりとモチーフを配した優美な抱一の下絵と、薄肉高蒔絵や螺鈿などを上品に組み合わせた羊遊斎の技法が、洗練された蒔絵作品を生み出し、好評を得ました。抱一と羊遊斎は、有力者からの特注品を手掛けるだけでなく、一般向けの装身具や茶器、食器なども手掛けており、その作品には、「抱一筆」といった抱一の銘と、「羊遊斎」や「羊

遊斎 更山」といった羊遊斎の銘が、ブランドネームのように明瞭に入られています。抱一と羊遊斎のコラボレーションは、人気商品として高い知名度を誇りました。

今回の展覧会で拝借しました「枕形硯箱」（個人蔵、図1・図2、以降本作品と呼称）は、羊遊斎と抱一、松江藩との関わりが窺える興味深い作品です。扇面を逆さにしたような形の硯箱ですが、これは枕の形を模したものです。硯箱の一面には動物、もう一面には赤い実をつけた南天が蒔絵であらわされています。動物は、長い鼻、大きな耳、牙を持つことから、象にも見えますが、枕の形との組み合わせを考慮すると、悪夢を食べる猿でしょう。猿の横には、擦れていますが金蒔絵で「抱一筆」、朱漆で「雨華菴主」の重郭方印が表されています（図3）。また、側面部分には、「羊遊斎」の銘があり（図4）、抱一下絵、羊遊斎作による作品であることが分かります。南天は、「難転」（難を転じる）と音が通じることから、おめでたい画題として喜ばれました。特に、猿と南天の組み合わせは、枕の意匠に多く用いられました。例えば、「猿南天蒔絵祝枕」（江戸時代後期、東京国立博物館蔵、図5）もその一つです。金の平蒔絵で猿と南天の文様、さらに九曜紋と折敷三文字紋が表されています。この家紋からすると、九曜紋を用いる大垣藩の戸田氏彬へ、折敷三文字紋を用いる淀藩の稲葉正守の娘が嫁入りしたときに制作されたものでしょうか。この他にも、尾張藩主に嫁いだ後恭院

福君所用という猿南天文様の枕（徳川美術館蔵）などが伝わっており、大名家の婚礼調度の一つとして好まれたようです。抱一下絵・羊遊斎作の本作品は、こうした由緒ある蒔絵の枕を硯箱に改変させた、趣向の凝らされたものであることが分かります。南天の枝の根本や葉の先がスラリと伸びる優美な姿は、抱一の好んだ描写であり、金粉や銀粉を用いることで立体感をもって表されています。

本作品の底部分をはずすと、「雲州大工軍兵衛作／文政三年辰十月」という墨書が見られます。つまり、本作品の木の細工は、雲州こと松江藩の指物大工が文政3年（1820）に作ったことが分かります。この年には不昧はすでに亡くなっていますが、羊遊斎は不昧の没後も彰楽院（不昧の正室）の注文に応じており、抱一も不昧の息子で松江藩を継いだ松平斉垣（号：月潭）と親交があり、羊遊斎、抱一、松江藩の間には依然として繋がりがありました。また、抱一の甥で姫路藩を継いだ酒井忠道の娘が斉垣に嫁いでいました。斉垣の治世における栄誉ある出来事の一つが、將軍より隠岐国（幕領で松江藩の預かり地）の善政を賞せられたことで、『徳川実紀』によると、それは文政3年7月1日のことです。本作品は、こうした松江藩に関わる慶事を記念して制作されたのかもしれない。（宮崎もも）

※図5は、『江戸蒔絵』（東京国立博物館、2002年）より複写しました。



図1



図2



図3



図4



図5

季刊 美のたより No.203

平成30年 7月 6日

発行 大和文華館